

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2019 年度
氏名	矢谷 碧	指導教員 (主査)	宇野 耕司

論文題目	<b>大学生の児童虐待啓発活動に対するイメージが 参加志向動機および不参加志向動機に及ぼす効果</b>
------	---

本文概要

**【問題意識と目的】**近年、児童虐待相談対応件数は年々増加傾向にあり、社会問題として注目されている。それに伴い様々な対策がされ、その中に「学生によるオレンジリボン運動」(以下、学生による OR 運動)がある。この運動は、近い将来親となる若者に対する子ども虐待防止に係る啓発の一環として、学園祭等で学生が子ども虐待防止のための活動をするものである。しかし、注目されていると言っても参加者は決して多くはなく、継続的に活動している団体も少ない。そこで、児童虐待が社会問題として注目されている現在だからこそ継続的な運動へと発展させていくことが必要であると考え、活動継続を決定する参加志向に焦点を当てた理論的枠組みを作成することが必要であると考えた。その要因として、イメージ(荒井, 2016)、自己効力感(高木, 1997)、体験満足度(高木, 1997; 新垣, 2006)が挙げられ、交互作用することなく参加継続に影響を及ぼしている可能性がある。そのため、これら3つの要因がどのように参加志向動機と不参加志向動機に影響を及ぼしているのかを明らかにすることで、学生による OR 運動を継続的な運動へと発展させるための示唆を獲得することを目的とする。だが、学生による OR 運動に特化した尺度は存在しないため、まずは測定尺度を開発することとする。**【研究1(尺度開発)】****【方法】**学生による OR 運動に関する授業を受講した学生に質問紙調査を実施し、欠損を除いた計46名の自由記述を分析対象とし、既存の尺度と内容を検討した。**【結果】**イメージ尺度44項目、参加志向動機尺度38項目、不参加志向動機尺度14項目、自己効力感尺度9項目、体験満足度尺度6項目を採用した。**【研究2(仮説検証)】****【方法】**2018年度学生による OR 運動に団体登録している団体のうち、高等学校を除く58校に調査依頼をし、調査協力が得られた計17団体に郵送にて質問紙調査を実施し、欠損を除いた計142名を分析対象とし、因子分析、階層的重回帰分析を行った。**【結果】****【因子分析】**イメージ尺度は、「虐待予防啓発かつ総イメージ」「否定イメージ」「概要イメージ」の3因子29項目を採用した。参加志向動機尺度は、「社会貢献志向動機」「OR 運動体験志向動機」「便乗参加志向動機」の3因子20項目を採用した。不参加志向動機尺度は、「報酬不足」「理解不足」の2因子14項目を採用した。自己効力感尺度は、「説明効力」「配布効力」の2因子9項目を採用した。体験満足度尺度は、「満足感」「負担感」の2因子6項目を採用した。**【階層的重回帰分析】**イメージ、体験満足度、自己効力感は参加志向動機と不参加志向動機に及ぼす影響を検討した。「社会貢献志向動機」は、「否定イメージ」「満足感」に正の影響、「負担感」に負の影響を及ぼした。「OR 運動体験志向動機」は、「虐待予防啓発活動イメージ」「否定イメージ」「満足感」に正の影響を及ぼした。「便乗参加志向動機」への影響は見られなかった。「報酬不足」は、「否定イメージ」「負担感」に正の影響、「虐待予防啓発活動イメージ」「満足感」に負の影響を及ぼした。「理解不足」は、「否定イメージ」に正の影響、「概要イメージ」に負の影響を及ぼした。**【考察と結論】**研究1において因子構造が明らかにでき、十分な信頼性を示す尺度を開発することができたため、学生による OR 運動に参加する学生に参加動機に関する研究に貢献できたと言える。だが、尺度の精度は決して高いとは言えないため、今後の研究でより精度の高い尺度を開発していくことが必要であると考え。研究2では、学生による OR 運動を継続的な運動へと発展させていくためには、活動を通してイメージを形成することや満足感を獲得することが重要であることを明らかにでき、運動を発展させるための示唆を獲得できたと言える。本研究で明らかになったことを基に、学生による OR 運動を継続的な運動へと発展させていくことが児童虐待を防止・啓発する上で重要であると考え。